

# 目次

---

はじめに	2
要点	
1章 入試小論文	4
2章 小論文とは何か	8
3章 考えること	20
4章 課題文読解・要約	24
5章 資料への対応	32
添削課題	
1章 テーマ型小論文	36
2章 課題文読解型小論文	38
3章 課題文読解型小論文	42
付録 論述の基本ルール	46

## Ⅰ Z会の教室 小論文の指導方針

本講座は、入試小論文で要求される読解・論述力の養成を目的としています。

入試小論文では、素材となる文章（あるいは図表・絵など）が示され、その素材の示すメッセージを読みとったうえで、制限時間内に、制限された字数内で自分の意見をまとめることが求められます。

「書き方が分からない」という悩みの多くは、こうした「素材の内容を適切にふまえた答案作成」というトレーニングの欠如によるものです。したがって、Z会では単なる「文章の書き方」の指導ではなく、その前提として「設問の意図を正しくとらえた意見とはどういうものか」という、独学では習得しにくい部分についてのトレーニングを行っていきます。

さらに「何を書くか」「どう書くか」がわからないままむやみに問題演習を積むことがないよう、また、出題のテーマを正しく理解せず、設問要求を取り違えた的外れな答案を書いてしまうことのないよう、入試頻出の様々なテーマについて理解を深め、自己の意見を組み立てるうえで必要となる具体的な知識についても、解説講義を通して習得していきます。

独学では習得しにくい、こうした小論文の基本を確実に押さえることで、最終的に難関大レベルのあらゆる出題に対応できる小論文の学力を養成していきます。

## Ⅱ 授業について

授業では「添削課題」を扱います。

### 予習

授業時間内に答案作成に取り組むため、原則として予習は不要です。ただし、授業の内容をより効果的に理解するために、事前に課題文に目を通しておくとよい場合があります。別途担当講師から指示が出た場合は、そちらに従ってください。

### 授業内

小論文講座では、講義だけでなく、実際に答案を作成することを授業の一環として位置づけています。これは、講義を通して得た知見を、授業時間内での答案作成を通して定着させることで、学習効果を最大限に引き出すことができるという方針に基づいたものです。各回の授業において、自分で答案を作成するという学習サイクルを守ることを、くれぐれも心がけてください。

### ※映像授業をご受講の皆様

・映像で問題演習の指示が出たら、映像を停止して問題に取り組みましょう。

・映像をご受講いただく前に、各講座のオリエンテーション映像をご覧ください。

## 復習

集中して授業に取り組み、講師の解説をしっかりと聞いた皆さんであれば、授業終了後は課題文の内容や論点として設定するべきテーマ、さらにそれを論じるうえで必要となる具体的な事例について、深く理解できているはず。まずは当日のうちに、授業での学習内容を振り返りながら、課題文をもう一度読み直しましょう。

答案の復習に際しては、課題文の理解は不足していなかったか、課題文の内容理解に基づいて適切に論点を設定できていたか、設問の条件をふまえた論述ができていたか、表記や表現は適切だったか、という観点から、自分の答案をしっかりと分析してみましょう。

## 三 テキストの構成

### ●要点

学習のポイントと頻出テーマについての基礎知識を整理しています。

### ●添削課題

授業で扱う問題です。

添削課題の取り組み方については、スタッフ・講師からの指示もしくは受講マニュアルに従ってください。

### ●付録

論述の基本的なルールをまとめています。

### ●問題のレベルについて

問題のレベルを★の個数によって三段階で表します。

★…基礎

★★…標準

★★★…応用（発展）

## 1章 入試小論文

君達の今通っている高校で、「小論文」がカリキュラムの中に設定されている学校は、皆無に近いと思う。かうじて、国語（現代文）の中で「小論文」の基礎を教えてくれる学校があるくらいだろう。だからこそ君達は、難関大学受験に出題されるハイレベルの「小論文」課題に立ち向かうため、この講座を選択したのではないだろうか。では、そのような君達に、次のような質問をしたい。

高校で学んでいない「小論文」が、なぜ、大学入試の受験科目として設定されているのだろうか。

この問いにしっかりと答えられない受験生に限って、「小論文なんて、ただ、マス目に字を埋めていけばよいのだ」「ただ、文章を書けばいいんですよ」という安易な姿勢のまま、ダラダラ学習していくことになり、最終的には、本番で痛い目にあう。決してそういうことにならないように、ここでしっかり、「小論文」という受験科目が設定されている背景について、学んでおこう。

### ●大学改革・大学入試制度の見直しとの関わり

従来の大学入試制度は、偏差値受験競争の過熱ぶりを招き、大学入試をゴールにして、小学校受験・中学校受験・高校受験が連なっており、受験競争は低年齢化している状況にあると言える。大学入試の改革は、このような日本の教育全体の見直しにもつながる。

見直しのポイント

入学のためだけに存在する今の受験システムが、本当に優秀な人材を見極めるモノサシとして機能しているのか。

←

偏差値・受験テクニック（センター試験等に見られる択一式問題形式が生む）を意識した、断片的な知識の詰込みや、瞬間的な判断で正誤を見極める問題に耐えられる学生が生き残る受験制度では、論理的思考力（次節「小論文とは何か」参照）や物事に対する意欲などの、学力以外の能力が育たない。そうした能力を持つ学生が評価されないことに、大学側が危機感を抱くようになる。

←

「脱偏差値」「脱画一化」を合言葉に、大学が、新しいモノサシ探しに試行錯誤しはじめる。

◆大学受験・大学入試制度において、大学に必要な人材を選びだす尺度が、偏差値だけではなく、多様化していかなければならないという認識が広まっている中で、「小論文」がクローズアップされるようになった。

評価尺度の多様化↓二次試験において面接や論文を課す大学の増加。  
調査書重視型の新入試制度の導入（特に医学部）  
受験科目を軽減する。

◆「脱偏差値」「脱画一化」を意図した科目であると考えられるならば、パターン化した答案・優等生的答案・一般論羅列型答案を提出していたのでは、かえってやぶへびだということを認識すべき。

大学入試制度の見直しの中で、「小論文」が登場してきた概略をみてきたが、ここでもう一度質問してみたい。

「小論文」が、なぜ、大学入試の受験科目として設定されているのだろうか。

「小論文」試験を課すことによって、大学側の狙い、大学はどのような人材を求めているのだろうか。

←

要求に応えるためには、何が必要になるのだろうか。



## 2章 小論文とは何か

### ■1 入試小論文課題で基本的に問われることⅡ大学側（出題者）のねらい

- ① 受験生の人柄、生き方、考え方、価値観などを探る。  
例) 社会的問題への問題意識・関心、洞察力、発想力などの有無など
- ② 大学進学（志望分野）への意欲や姿勢を探る。  
例) 大学で学ぶ意義の自覚、志望分野（専攻）の明確化、教養の幅や深さなど
- ③ 大学で学問に取り組むための基礎力を探る。  
例) 専門の文献や資料を読みこなし理解する力（読解力）、論理的に自分の意見を組み立てる力（論理的思考力）、自分の意見・考えを他者に文章で伝える力（文章表現力）など

### ■2 「小論文」という文章の条件

小論文とは文字通り、「小さな論文」である。そして「論文」とは、あるテーマについての自分の考えを論理的に述べた文章である。「論理的」というのは、情緒や主観や感情に流されることがなく（あるいはそれに頼ることなく）、客観的妥当性を備えた論拠を示すことで、自分の言いたいことを証明し、他者（読み手）に説得的に伝える方法と捉えられよう。さらにわかりやすく言い換えると、次の三条件がみたされることが「小論文」として重要である。



【小論文に不可欠な三条件】

- ① あるテーマに関する自分の言いたいこと（主張）を根拠（理由）を明らかにして述べていること
- ② その根拠が「他者（読み手）」にも説得力（そういう理由（具体的・客観的根拠）からすれば、この主張は妥当・納得できると思わせる力）をもつこと
- ③（自分とは異なる考え・価値観・立場を持つている）「他者（読み手）」が読むことを想定し、丁寧な考察を加えていること

■ 3 「小論文」という文章作成にあたって心掛けたいこと……小論文には唯一正しい解は存在しない

入試小論文で出題されるテーマ・課題は、■ 1で示してきたようなことを基本的に問う意図を持つため、他の受験科目でよく見られるような、唯一正しい解（答え）を記述したり選択肢から選ぶことが可能といった単純なものではない。

例えば、大学で学んでいこうとする自分を考えようとするれば、「なぜ、大学なのか」「大学で何を、なぜ学ぶのか」「大学で学ぶとはどういうことなのか」「そもそも、大学とは何なのか」あるいは「自分は大学で学ぶのにふさわしい人間なのか」「自分の人生にとって、大学は本当に不可欠なのだろうか」等々、様々な疑問や問題が出てくるだろう。これらの疑問・問題は互いに緊密に絡み合っているし、数学の問題のようにすっきりとした解が用意されているわけでもない。また、その解の内容は、一人一人違っており、その人の置かれている状況や関係の推移の中で変わっていく部分もあるかもしれない。だから、君達は、このやっかいなパズルのような、一筋縄では解けない入試小論文課題を、個別の疑問や問題ごとに丁寧に、かつ柔軟に解きほぐし、分解したり組立直したりして、十分納得のいく独自の解を見つけ出す、独力での作業を要求されることになる。小論文の学習で、先ず求められるのは、こうした粘り強い思考を続けていく覚悟である。

テキストや講義では、各課題の解を導き出すための手助けやヒントは与えられるかもしれないが、それらはほんの僅かなものに過ぎない。とにかく自分の力で考え抜くこと、思考を途中で放棄したり、問題から逃げるために安易に他人（教師や友人達など）に意見を求めそれに引きずられないようにしたい。

■4 「小論文」を構成する三つの基本要素

「■2『小論文』という文章の条件」部分で、「小論文」が文章による自己の見解の証明であり、それに（心構え・認識の上で）最低限必要と思われる三条件を示した。今度は、実際、解答用紙（原稿用紙）に「どう書くか」（『どう論述展開していくか』考えていく上で最低限必要な三つの基本要素（「問い」「答え」及び「証明のプロセス（論拠）」）について説明しておきたい。またそれらに加えて、論述内容を効果的にする素材（材料）及びその活かし方について触れておきたい。

【1】論点（『論ずべき問題点』）

論述の中心となる「問い」、あるいは、論述で証明しようとする中心問題を引き出すための「問い」である。

これは設問文で示されていることもあるし、設問の要求に従って自分なりに設定していくべき場合もある。（→さらに詳しいことは、■6 小論文を書き上げるまでの流れ・手順、そして論述のポイント」を参照のこと。）

【2】主張・見解（『論点（問い）に対する（答え）』）

「問い」（論点）に対する「答え」、あるいは、その答えを踏まえての自分の考えまでを含むもの。

### 【3】論考・論証（分析・考察）

いわゆる「証明のプロセス」であり、設定した「問い」（論点）に対する「答え」（自分の主張・見解）の論拠となる部分である。小論文で取り扱うのは、現実に生起する（した）様々な問題であるから、証明の道筋は一つとは限らない。複雑な現実を自分なりに整理し、分類し、いくつかの角度から「答え」に向かってアプローチしていくことになる。（議論の）対象となっていることを要素に分けて考えることが「分析」であり、その結果から納得のいく「答え」を導き出すことが「考察」である（実際の作業はこれらを合わせて行うことになる）。

### 【4】論述の素材（材料）

他者（読み手）に、論述で扱う問題の由来や意味、それについての自分の分析・考察のプロセスをわかりやすく伝えるためには、具体的な事例を示すことが有効である。自分の体験や見聞きした出来事（社会的事象・現象）あるいは歴史的事実などから、適切なものを選ぶことになる。素材（材料）やその活かしかたで、論の印象がずいぶんと変わる。それ故、日頃からの材料集めが、大変重要となってくる。

### ■5 「小論文」の構成（展開）を考える上でのポイント

既述したように、「小論文」とは、一つの問題（「問い」）について「答え」を導き出すプロセスを文章化したものであり、ある条件（設問文で要求されていること・テーマ・提示されている資料や課題文・指定字数等）の下での言葉による論証作業である。限られた字数内で、自分の考え・主張の証明を、効率よく、しかも読み手に伝わりやすいように行うにはどうしたらよいか。これが「構成（論の展開の仕方）」を考えていく上でのポイントである。先に説明した、小論文を成立させる「論点（問い）」「主張（答え）」「論証（証明のプロセス）」の三要素がきちんと盛り込まれていれば、展開の仕方は自由である。逆に言えば、この三つの要素を構成の基本にすればよいのである。まずは、この三要素をもとにした基本パターンをマスターしたい。

① 基本は「三部（三段）構成」

三つの基本要素を備えていることが基本とすれば、小論文の構成の基本は、「序論・本論・結論」の「三部（三段）構成」である。以下、その基本パターンを示しておく。

【小論文の基本パターン……三部（三段）構成】

- ① 序論……「論点」提示⇨議論したり自分が考える対象としての「問題（現象）」の指摘・明確化
- ② 本論……論証⇨分析・考察を通じ、問題の本質的原因や現状を探る
- ③ 結論……「主張・提言」⇨分析・考察を通じ説明したものを踏まえての自分の意見

〈それぞれの部分で問われる受験生の資質〉

- ①⇩「問題意識」を持っているか、その漠然とした問題意識から「問題」をはっきりさせその核心に迫ろうとしているか。
- ②⇩「論理的思考力」を備えているか。
- ③⇩「ものの見方・考え方」「人柄」「姿勢」。

## ② 基本パターンの応用

「三要素」が盛り込まれていれば、序論にあたる第一段落で、自分が述べようとする主張の要点をまず明示する、といった形（応用パターン）にしてもよい。いわば結論を先に示す形で、当然、結論部分では序論部分の内容と重複する形になるが、「書き手」（君達自身）にとっても最初に主張（自分が一番言いたいこと）をしつかり意識することになり、論の展開がずれていく心配が少なくなる。小論文に慣れていない段階や、自分にとって論じにくいテーマの場合は、有効な方法である。「読み手」にとってもそれは、「書き手」が何を言いたいのか、予め明確にした論述展開となり、読みやすく理解しやすいという側面を持つ。

## ③ 「序破急」「起承転結」などの「型」の問題点

小論文の構成の基本として、「序破急」「起承転結」などを挙げるものが多く、そうした「型」にはめて書かなくては……と思いがちであるが、これらの構成法は実は非常に難しい。特に問題となる点は「破」「転」の部分である。論理的に書くべき小論文においては、無理に内容を「転」じさせようとして、論の流れ（展開）を崩してしまう恐れがある。つまり、「転」じさせようとする（型にはめようとする）あまり、内容がスムーズに、そして読み手にすんなりと受け入れられる構成（展開）にならない危険性がある。そうした問題点を意識した上で活用すべきだろう。

## ④ 論の構成と段落分け……形式主義に陥らない

### ◆ 段落は論理的構成と切り離せない。

まったく段落分けをせずに、自分の考えを論述している答案を見かけるが、これは論外である。ましてや、八〇〇字、一〇〇〇字、一二〇〇字といった字数の多い小論文で段落分けがなされていなければ、「読み手（採点者）」はそれだけで読む気をなくしてしまう。つまり、主張したいこと・考えていることを論理的に整理し、順序立てて伝える努力すらできない受験生だと判断されてしまうのである。

基本的には、一つの段落は一つの内容から成ると考える。例えば、論点の提示で一段落でまとめる。具体例

の提示とその分析を一段落にまとめるといったように、十分に意識しながら論述を進めることが大切である。

◆ 段落のたて方に唯一の型はない……「初めに形式あり」ではない。

「いくつかの段落で論述すればよいか」という質問が寄せられることが多いが、この質問は無意味であることを認識したい。小論文全体における段落のたて方に唯一の型はない。段落の数は、まず制限字数によっても異なるし、君たちが論述するテーマ・内容によっても変わってくる（もちろん、六〇〇～八〇〇字程度であれば三～四段落が適当ではないか……というような、大体の目安はあるが）。

しかし、「始めに形式あり」ではないことを、しっかりと意識して取り組もう。さもないと、もつとも重要な「考える」作業がおろそかになる恐れがある。形式を優先させるのではなく、設問要求、内容、そして制限字数等を考慮し、柔軟に対応することが肝要である。

## ■ 6 小論文を書き上げるまでの流れ・手順、そして論述のポイント

小論文の書き方に、決められた方法というものはない。また、テーマ型の課題なのか、課題文読解型の課題なのかによってもそれは変わってくる。ただ、課題に取り組み、実際小論文を書き上げていく上での作業の流れ・手順はおおよそ決まっている。そのおおよその流れ・手順をここに示しておく。書き慣れないうちはここに示した流れに従って課題に取り組み、慣れてきたら自分なりに書きやすいように少しずつ流れを変えていくとよい。繰り返し述べるが、ここに示した流れに従って書き上げなければならないわけではなく、自分なりにもつとよい方法があればそちらを採用してももちろんかまわない。

◇ 手順1 「要求されていること（＝問われていること）」を確認する

① 設問文の分析 ↓ 出題者の要求・意図をよむ・汲み取る。

テーマ型・課題文読解型（↓後述）等、小論文の課題と言っても、いくつかの出題形式がある。どの出題形式であっても、「設問文」が課題に取り組み際の「スタート」地点である、と認識しておきたい。「何をどう書くか」を「考える」には、まず、出題者の側が君達に「何を」「どのように」論考・論述させようとしている

のか、正確に把握することが重要である（現実問題として、この設問要求に对应していない論考・論述は評価されない。「的外れ」論述とみなされる）。

言い換えれば、設問文を丹念に読み、出題者の要求・意図・課題文（資料）の位置づけなどを確認し、出題の全体像を把握した上で、その後の（「読む」「考える」「書く」などの）作業に取り組む。

●設問文Ⅱ① 出題者のメッセージとしての役割

出題者の基本的考え、なぜこうした課題を出題したのか等、出題者の意図や、その課題について考える前提、切り口などの糸口（ヒント）が示唆されていることが多い。

② 論述していく上で最低限満たすべき条件の提示

論ずべきテーマ、そのテーマについて論じていく上での付帯条件（例 必ず具体的事例を用いる、課題文読解型の課題であれば「課題文筆者の考えを踏まえ」た上で論述する等）、指定字数（「～字以上～字以内」というような指示があれば、その下限字数以下のは評価の対象外Ⅱ不合格となる等）などは、必ず確認し守るべき情報である。

② 課題文(資料)の読解

課題文(資料)をどう読解していくかは、出題者が設問文で論考・論述するよう要求していることにより、微妙に変わってくるので慎重な判断が必要である。

●課題文Ⅱ① 課題文筆者のメッセージであり、同時に、出題者のメッセージでもある(「何故、今この

課題文を出題者が読ませたいのか」という意図を汲み取る)。

② 論考・論述を自分なりに始める上で、使うべき「素材(材料)」として提示されているもの。

◇手順2 「論点」を明確にする(Ⅱ「論点」を絞り込む)

設問文で要求されていること(問われていること)の枠組みの中で、自分がこれから特にとどのような問題点について論じていこうとするのか明確にする作業を、「論点を絞る」という。

例)【テーマ型課題】「豊かさ」について、あなたの考えることを論述しなさい(六〇〇字以内)。

↓このような課題は、「豊かさ」という「テーマ」について論考・論述し、指定字数を守っていれば許容される、かなり自由度のある課題だ。しかし、やはり「高い評価(Ⅱ良い小論文である、評価に値する論理的文章である)」とみなされる小論文を論述する努力・工夫は欠かせない。その一つが、この「論点を絞る」作業である。

現代社会の「豊かさ」について問題意識を持っているか否か、が確かに大切だからこそ、こうしたテーマが出題されているわけだが、提示された漠然とした「テーマ」(それも指定字数では到底十分論じきれないような)を、どれだけ「自分」の問題として引きつけることができているか、自分なりにその「豊かさ」というものに切り込もうとしているかが、この「論点の絞り込み」(論点設定)の部分に反映されると言われる。



つまり、ただ「豊かさについて考えろ」と出題者が言っているから、仕方なく「豊かさ」という漠然とした「テーマ」を、自分の論ずべき「問題」として捉え、「豊かさとは何か」「豊かさを得るためには何が必要か」「豊かさ」を測る尺度とは何か」「私自身は『豊かさ』を享受していると言えるだろうか」など、自分なりの「問い（疑問）」をいくつもいくつも切り出してくる作業が必要だ（要するに、次々とその「テーマ」について「問い（疑問）」を重ねていけるよう、主体的に関わることが大切である）。

そのいくつも切り出された「問い（疑問）」の中から、自分自身が最も論じてみたい、あるいは、最も論ずる価値があると思われるものを「論点」として絞り込むことが、「考察」の深まりにつながる。「考察」が深まれば「主張」の根拠づけ（証明）も確かなものとなる。そうすると「主張」も読み手に対して説得力を持つものとなる。要するに、「論点」の明確さ（＝何について・どのような問題について論じるのか）が、その小論文の出来具合を決定づける重要事項の一つである。

◇手順3 「主張」を明確にする（＝「論点」(問い) に対する「主張」(答え) を見出す)

「論点(問い)」の次に大切なのは、「その論点についてどんなことを考えるのか(何が一番言いたいのか)」をはっきりさせることである。これが「主張(問いに対する答え)」である。

例) 先述した「『豊かさ』について、あなたの考えることを論述しなさい」という課題をもう一度使って考えてみよう。◇手順2で明確にした「論点(問い・疑問)」について、自分の考え・言いたいことが固まるまで、様々な角度からじっくり考えてみよう。

論点(出発点)「『豊かさ』とはどういう状態をさすのか」

↓心が満ち足りた状態のことだろうか。

↓「心が満ち足りる」ためには何が必要だろう。

↓心身両面の健康／信頼できる友人・家族／経済力／名声・地位／明確な目標・生きがい。それらの中で今の自分が手に入れたものは何か。

↓「信頼できる友人」だ。なぜそう思うのか。

↓友人との交流を通して、自分と異なる考え方に触れることができるから。そのことと「心が満ち足りる」こと、「豊かさ」とはどう関係するか。

↓\*さらに考える。

◇手順4 「論点」↓「主張」をつなぐ(Ⅱ論拠を示す)

「◇手順3」で拡がった様々な考えを整理し、「論点」から「主張」を導くために必要となる要素(Ⅱ「論点」↓「主張」の流れが、読み手を納得させ得るものⅡ論理的に矛盾を感じさせない形となる要素)を発見し、まとめる。「論点」「主張」の明確さも小論文の評価をする上で大変重要な項目である。しかし、小論文は、偏差値科目では測れない「論理的思考力」をチェックするために受験科目として存在している……という側面から、君たち自身がどんな考察をして主張を導き出しているか、「読み手(採点者)」はそのプロセスの部分に注目する。小論文全体の「明快さ」と「一貫性」を打ち出せる論拠を、十分な考察によって提示していこう。「論点」とのかみ合わせ、また、言うまでもなく「主張」との結びつきは大前提である。

・注意事項 1 論拠（＝自身の主張・見解に対する理由づけ）を欠いた結論（主張部分）は単なる標語・スローガンに陥りやすい。

2 具体例を示しただけで、論拠提示したつもりにはならない。論点とその具体例、具体例と主張をつなぐ「考察・分析」が十分なされ、それが文章に反映されていなければならぬ。

◇手順5 構成をたてる（論述の展開を考える）

指定字数の中で、説明要求を満たしつつ、小論文の基本的三要素を確かめつつ、論述のアウトラインを作成する。その際、段落構成などにも注意を払う（先述の「■5 『小論文』の構成（展開）を考える上でのポイント」の項、参照のこと）。

◇手順6 推敲する

作成したアウトラインを再度見直し、論理的に矛盾はないか等、内容面でのチェックを行う。

◇手順7 答案を作成する（論述する）

◇手順8 書き上げた答案を読み直す（自分の言いたいことが他人にわかりやすく表現されているか、あいまいな言い方になっている部分がないか、表記の誤りがないか、等の自己チェックをする）

小論文で一般的に求められるのは、設問文で与えられたテーマや題材（課題文・資料）をもとに、受験生自身が「考え」た内容を、読み手に伝えるために論理的に「書く」ことである。「あなたの考えを書きなさい」「あなたの思うところを論述しなさい」といった設問要求こそが、小論文の根本をなしている。

しかし、君たち受験生にとって最も厄介なのがこの「自分の考え」「自分自身の思うところ」であろう。その「書く」べき内容（自分の考え・思うところ）がないことに気づいたり、どう絞り出そうとしても出てこない……何を、どうすれば、どう「考え」れば、「書く」べきことが内に溢れ出てくるのか……。そんな苦しい思いをした経験がないだろうか。そうした経験をしたことがある人、今現在している人、或いは、幸いにもそうした経験はないが、「書く」内容が一般的に一般論として言い古されていることや常識的なことばかりで、「自分なりの」＝「独自性のある」論述がなかなかできない……とあせっている人達に、「書く」ためには「考える」ことが不可欠である点、そしてその「考える」ことを活性化させていくいくつかのヒントを提示したい。

■ 1 厳密な意味で、完璧に「独自性のある」「オリジナル」な考え・主張などない、と開き直る。

↓大切なのは、他者の言葉を「鵜呑み」にしたり「借りる」のではなく、それを自分がどう受けとめたかを言語化してみること＝「自分」の対象化＝「自分」「わたし」を切り捨てない。

↓独自性・オリジナリティは奇抜さのことでもなく、「教え」てもらえるものでもない。

極端な言い方をしたが、あまり「自分なりの」「独自の」考えを書こう……とあせらない。むしろ、私達は過去の様々な人々の業績や、同時代の人々の多様な発言を受けとめ、咀嚼し、それらを関連づけたり、ばらばらにしたり、あるいは見方を変えてみたりする等の試みを通して、自分自身の「考え」を育てている。

大切なのは、他者が言っていること（マスメディアの報道・本や論文で読んだこと・評論家の説・教師や親の言葉等）、一般論、常識などを「鵜呑み」にし、あたかもそれを自分の「考え」であるかのように「借りる」のではなく、自分がそれらをどう受けとめたのか、ありのままに見つめることである。そしてその際、「感じたこと」を言語化してみよう（＝自分の感じたことを対象化・相対化する努力の積み重ねをする）。

ある文章を読み、筆者の言葉に「何となく納得がいく」↓「だからこの筆者の言っていることに賛同」↓「独自の考えが出てこない」……ではなく、「何となく納得がいく」という自分の感想＝感覚的反応を、考察の対象として吟味することが、「論理」的に「考える」ことの始まりなのである。つまり、「その『何となく納得のいく』部分とは、具体的に言うところなのだろうか？」などと、自分自身があまり問題意識を感じてこなかった、その自分自身の「ものの見方・考え方」を「問い返す（見つめ直す）」ことが、「考える」ことの出発点になる。

## ■2 他者の視点を持つ⇨他者への想像力を持つ。

■1で示してきた方法は、あくまでも出発点は「自分」にこだわることにポイントがある。だが、「自分の日常生活（現実）」には、必ず「他者」が存在する。小論文で「考える」よう求められるテーマ・問題は、その「他者への想像力」なくして容易に「答え」らしきものが見出せないものが多い。

例えば、東京都民の生活は、地方に作られたダムや原子力発電所によりそのエネルギー消費を支えられている。そうした「東京都民」（或いは都市生活者）としての自分の立場からのみ「原子力発電所の是非」について「考え」ても、それはダムや原発のある一部の地域の「他者」達の不便さ・不安を考慮・理解した上での議論とはみなせない。

あるテーマ・問題について自分が出した結論について、「本当にそうなのか」と検証していく際にも、他者の視点は役立つ。また、その問題へのアプローチ方法を新たに発見する手助けともなる。日頃から、他者の視点から「考える」ことは、幅広い思考を養う土台となる。

### ■ 3 「分析」という方法とその活用

#### ① 「分析」Ⅱ対象（現象）を構成要素に分けて説明する。

↓複数の立場・角度から対象（現象）にアプローチしていく

例えば、「高校教育のあり方」について考察・議論する場合を考えれば、教師・生徒・親・教育システムを運営したりチェックする側など、それぞれに意見は異なり、それぞれの立場で、問題の感じ方、問題への接し方も異なる。このように、考え、議論すべき対象・現象・問題を、それを構成したり発生させている要素・要因に「分けて」説明したり、その本質に迫る方法を「分析」という。

#### ② 「分析」の活用Ⅱつながりを見る・違いを見る。

ある問題点を分析し、また、自分が知り得た様々な分野の問題点を考え合わせると、人間の現実生活の中で起こる社会的現象は互いに「つながり」を持つことに気づく。その発見によっては独自性をアピールすることにもなる。この「つながり」を見る思考は、個々の出来事の共通点を取り出し、或いは、全く違う世界で起きたことをも自分の問題として考えていく役割を担う。

また、この社会（世界）に起こる個々の出来事には、「つながり」だけでなく、異なる点もある。そうした違い（ズレ・相違点）に着目するのも、重要な考察となる。それは、出来事や問題の特徴、限界等を明確化し、それをもとに他者への想像力をもたらし、或いは「つながり」と合わせて、問題の本質や問題解決への条件を探っていく役割を果たすのである。

